

ヨハン・ガルトゥング博士との思い出

安齋 育郎

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長

2024年2月17日、時に「現代平和学の父」と呼ばれるヨハン・ガルトゥング博士がバーラム（ノルウェー）の医療機関で亡くなった。93歳だった。

博士は1930年ノルウェーのオスロに生まれ、オスロ大学にて数学および社会学の博士号を取得、20代半ばには「良心的兵役拒否者」として12カ月間の労働に従事し、労働期間の延長を拒否したために労働刑務所に6カ月間収監された。自らの意思を放棄しない実践者だった。

30歳に満たない若い研究者だったガルトゥング博士は、1959年、世界初の平和研究の専門機関である「オスロ国際平和研究所」(PRIO)を創設して所長を務め、1964年には雑誌“Journal of Peace Research”を創設し、ヨーロッパの平和研究をリードした。

1987年には、“もうひとつのノーベル賞”といわれる「ライト・ライブリフッド賞」を受賞、その6年後、平和的手段による紛争解決のための国際NGOである「トランセンド・インターナショナル」を創設した。1990年代には立命館大学で3年間にわたって国際関係学部の客員教授を務めた。

ガルトゥング博士は、「戦争の対置概念」としての平和を「消極的平和」と捉え、飢餓・貧困・差別・人権抑圧などの「暴力」のない状態を「積極的平和」とする概念を提起したが、ここで言う「暴力」とは、「満足させられるべきニーズを満足できないよう攻撃を加えること」として広く捉えられた。そして、戦争や銃乱射事件のような、暴力の原因者

が直接見て取れるような暴力を「直接的暴力」呼ぶのに対し、地球環境問題のように原因が社会のあり方の中に編み込まれているような暴力を「構造的暴力」、さらに、直接的暴力や構造的暴力を助長するような文化のあり方を「文化的暴力」と呼んだ。

ガルトゥング博士の在任中は、国際関係学部で「ガルトゥング研究会」とでもいうべき集まりが定期的に開かれていた。毎回誰かが冒頭に話題を提供し、それを踏まえてガルトゥング博士も交えて自由に討論を行う。筆者が報告当番に当たった回には、1970年代に東京大学医学部助手だった頃に筆者が原発政策批判のために凄まじいアカデミック・ハラスメントを受けていた体験を報告したのだが、報告後、ガルトゥング博士は「私の若いころの体験と似ている」と言った。おそらくガルトゥング博士も、自らが信じる道を追求し続ける生き方を貫いていたのだろう。その結果、社会の常識的規範とぶつかり合うようなことが多々あったに相違ない。最近筆者は、原発問題に関する著書などに署名を求められると、「生きたいように生きたい」と書くことにしている。2024年2月と7月、筆者は、筆者自身が館長を務める「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」という2021年3月11日に福島県楢葉町の古刹・宝鏡寺境内に開設した平和博物館に、君島東彦・国際平和ミュージアム館長の仲介で中国の若者たちを迎えて対話する機会があった。国家の政策に真っ向から批判を加えた結果「反国家的イデオログ」との烙印を押され、執拗かつ不快なハラス

メントを体験した筆者の経験を聞いた中国の若者は、“Do you have any regret?”（悔いはあるか？）と筆者に尋ねた。筆者は、“No! I want to live as I want to live”（いや、私は生きたいように生きたいのだ）と答えたのだが、おそらくガルトゥング博士ともそうした考え方を共有していたように思う。

ガルトゥング博士とは時々国際平和ミュージアム裏の「鉄平」という飲食店で大学院生らとともに会話を楽しんだが、そんなある日、ガルトゥング博士から『日本は危機か?』という本と一緒に書かないかという誘いがあった。驚くべきことに、この「鉄平」での話は、それから僅か2～3か月後の1999年8月、かもがわ出版から『日本は危機か』という本となって書店に並んだ。博士は、いつどこに居ようとも、その時、その場で感じ取ったことを体系的に意識化し、時空の座標軸の上に自在に展開して見せる天才だった。

客員教授の任期を終えた後も、ガルトゥング先生は時々日本を訪れたが、2008年に立命館で開かれた第6回国際平和博物館会議にも来日された。そして、その年の12月、京都駅前にあった安齋科学・平和事務所で、ヨハン・ガルトゥング×安齋育郎対談「憲法9条と日本の未来」（英語）が実現した。その内容は、“Talk between Johan Galtung and Ikuro Anzai, Article 9 and Japan’s future”として、下のURLから英語で閲覧可能だ。その概要は、このエッセイの〈補遺〉として紹介しよう。

<http://asap-anzai.com/wp/wp-content/uploads/Talk-between-Johan-Galtung-and-Ikuro-Anzai-Article-9-and-Japans-future-2008.pdf>

ガルトゥング博士にとっては、日本国憲法9条は「日本は直接的暴力としての戦争をしない」ということを宣言したいわば「消極的平和」に関する規定で、「積極的平和」のためには、経済的・政治的安定、基本的人権の尊重、公正な法の執行、政治的自由と政治プロセスへの参加、快適で安全な環境、社会的な調和と秩序、民主的な人間関係、福祉の充実、個人における幸福の存在などの諸条件が満たされる必要があるという。

ガルトゥング博士が逝去された3週間後、3月8

日の「国際女性デー」を前にイギリスの経済誌『エコノミスト』が主要29か国の「女性の働きやすさランキング」を発表したが、日本は最下位から3番目だった。この国にはまだまだ人間の能力をフルに発揮する条件が誰にでも平等に保証されている訳ではないこと、その意味で、だれもが「生きたいように生きられる」社会ではないことを改めて痛感しながら、ガルトゥング博士の逝去を思い起こしたことだった。

ガルトゥング博士と同時期に、立命館大学国際関係学部には評論家の加藤周一さんが客員教授として教壇に立っていた。加藤さんが来京する日には、ファンが集って「加藤周一さんを囲む会」を開催していた。世話役はかもがわ出版の湯浅俊彦さん、会の代表は形式上筆者が務めていた。会は夕食会だけでは収まらずに二次会で居酒屋を訪れたが、それらの会での対話の様子は、後にかもがわ出版から『居酒屋の加藤周一』という2巻本となって刊行された。もったいないことに、加藤周一さんとヨハン・ガルトゥング博士という日本とノルウェーの知の巨人が同席して丁々発止と議論を戦わせる機会はあまりなかった。一度、ガルトゥング博士の寄宿先に加藤さんをお連れしたことがあったが、二人は明治・大正期の日本の近代について真剣な議論を戦わせた。知の巨人二人は、該博な知識と時空を超えた諸事象の関連性の理解を土台に、目の前のトピックスについて縦横に議論を展開するヒューマン・インテリジェンスの横綱相撲を見るようだった。

人生を生きる上で、何か問題に直面したとき、「あの人ならどう判断し、行動するか？」と頭の中で問いかける人物がいる。ヨハン・ガルトゥング博士と加藤周一さんは、疑いもなくそうした意味での指標的先達であり、恩師と言ってもいいだろう。そして、筆者にはもう一人の忘れ得ぬ恩師として、ポーランド出身の核物理学者ジョセフ・ロートブラット博士がいる。博士はポーランド国籍をもちながらも、第2次世界大戦中にはアメリカ・イギリス・カナダによる共同原爆製造計画「マンハッタン・プロジェクト」に特例として招請されたが、ナチス・ドイツが原爆を開発していないことが明らか

になると、「このような恐ろしい死と破壊の道具は無い方が世界のためだ」と確信して、ただ独りマンハッタン計画から離脱した気骨のある科学者だった。筆者がロートブラット博士と知り合ったのは1977年、日本の反核団体と市民団体が協力して開催した国連NGO主催の「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」の時だったが、博士はフィリップ・ノエルベイクー氏やショーン・マクブライド氏などのノーベル平和賞受賞者とともにシンポジウムに招待されていた。私は日本科学者会議代表として運営委員を務めていたが、博士とは同じ放射線科学分野の専門家として議論する機会もあり、以来、博士が原水爆禁止世界大会に招待されて来日した機会などに親しくお付き合い頂き、それは1995年に博士がノーベル平和賞を受賞するまで続いた。マンハッタン計画でも、「生きたくないようには生きなかった」博士は、「自分の人生の生き方に誠実だった」人として疑いなくわが恩師であり、いつも私の右斜め3歩前をゆったりと歩いている。では、左3歩前と直前3歩前には誰がいるのか。左にヨハン・ガルトゥング博士が、そして目の前には加藤周一さんがいる。

筆者の悔いは、ジョセフ・ロートブラット（1908～2005）、加藤周一（1919～2008）、ヨハン・ガルトゥング（1930～2024）という同時代を生きた3巨人と知り合う恵まれた関係もちながら、ついに、3巨人の鼎談をコーディネートできなかったことだ。生き方に悩むとき、この人たちならどの道を選ぶかと考える。これからもわが人生の座標空間に屹立する3本の基準軸として、勝手ながら筆者はちらちらと目配せしながら生きていたいと思っている。

〈補遺〉ヨハン・ガルトゥングと安齋育郎の対談（2008年12月）

編集：藤田明史、ロバート・コワルチュク

テーマ：憲法9条と日本の将来

安齋育郎は立命館大学国際平和ミュージアムの名誉館長、ヨハン・ガルトゥングはTRANSCEND—平和と発展のためのネットワークの創設者です。

●安齋：立命館大学国際平和ミュージアムは1992

年に設立されました。それ以来、このミュージアムには多くの若い世代を含む90万人が訪れており、これは非常に重要なことだと私は思います。このミュージアムは大学に併設された最初の平和ミュージアムと言われ、残念ながら今でもそうです。これは大学の歴史を考えると非常に興味深いことです。

立命館は1920年代から1940年代にかけて非常に軍国主義的な大学でした。1928年には京都の中心にある天皇の宮殿を守るために「騎衛隊」と呼ばれる武装部隊が組織されました。3年後の1931年にいわゆる満州事変が起こり、日本は計画していた北中国征服を開始することができました。石原莞爾はこの事件の舞台裏で非常に積極的に関与していましたが、10年後の1941年に立命館大学に教授として招かれ、大学の国防研究所の初代所長に任命されました。1943年以降、立命館は約3000人の学生を戦地へ送り、そのうち約1000人が戦争で亡くなりました。同数の学生が日本の軍需工場に送られ、軍需品、爆弾、飛行機を製造しました。当時、大学には台湾や朝鮮半島からの留学生がたくさんいましたが、立命館は天皇の兵士になりたくないという理由で彼らを追い出しました。ですから、立命館大学は当時の大学の中でも特に軍国主義的でした。ダグラス・マッカーサーは、第二次世界大戦直後に廃止すべき大学として、東京の国士館大学、三重県の皇學館大学、京都の立命館大学の3つを挙げました。

◆ガルトゥング：なるほど。

●安齋：日本がアジア太平洋諸国を侵略し、その報復として日本国民も大きな被害を受けたときでも、立命館は政府の戦争政策に非常に協力的だったということですね。私は現在、47都道府県の人々が経験した空襲に関する5巻セットの本を執筆中です。1945年3月10日の東京大空襲を含め、これらの空襲で約70万人が亡くなりました。

◆ガルトゥング：付け加えたいことがあります。ドイツでの空襲では約60万人が亡くなり、これは非常によく記録されています。これは非常に重要なことです。なぜなら、これらの話題は長い間タブーとなっていたからです。それは勝者の側の物語でした。「これらの人々を味方につけるためには、少し殺さ

なければならなかった」。そして今、あなたは日本への空襲に関する5巻の本を出版する予定なので、それを聞いてとても嬉しく思います。

●安齋：もちろん、日本人は広島と長崎で原爆を体験しました。ですから、第二次世界大戦直後、日本人は平和が最も重要であると考え、これが私たちの「平和憲法」を生み出した基本的な考え方でした。

◆ガルトゥング：日本の憲法は不戦憲法であり、それだけでは不十分です。前文に表現されている理念は、日本が二度と戦争の惨禍に見舞われることがあってはならないというものです。あなたが指摘するように、当時は憲法第9条に対して前向きな姿勢があったのかもしれませんが。

●安齋：そうです。戦後、日本人にとって最も重要なことは、次の戦争を避けることでした。

◆ガルトゥング：そして今、この瞬間、アメリカ合衆国は人類史上最悪の戦争を二つ戦っています。その二つの戦争は、長崎と広島に続いて、胎児に恐ろしい影響を与える劣化ウランなどの兵器を使用した最悪の戦争であり、日本は彼らを助けているのです。積極的に戦争に参加しているわけではありませんが、人類史上、他のどの国よりも多くの戦争を行っている国を支援しています。もちろん、彼らはそれを防衛と呼び、誰もが防衛と呼んでいます。これはあまり独創的ではありません。問題は、その間に日本に何が起こったかということです。安齋教授、あなたは第9条に至るまでの経緯を説明しました。そして現在、日本政府はそれを破壊し、歪曲し、恐ろしい戦争への連帯を支援しています。しかし、私が尋ねたい質問の1つは、米国がこれらの戦争に負けて撤退したら、日本はどうなるのかということです。以前にもそうしたことがあり、ベトナムがその例です。日本は当時も一定の役割を果たしましたが、今では日本の自衛隊が国際水域に進出し、西へ西へと移動することで、その役割ははるかに顕著で、はるかに明確になっています。そこで彼らが守ることができるのは日本の「自己」ではありません。では、アメリカがこれらの戦争に負けたらどうなるのでしょうか。

この質問を少し別の言い方で言いましょう。日本

政府が受け入れることができることには限界があるのでしょうか。それとも、軍国主義の日本に勝利したときのように、アメリカが「勝ち続ける」と本当に思っているのでしょうか。

●安齋：この国には130を超える米軍基地があることがわかっています。自衛隊の軍事予算は年間500億ドル近くで、現在世界で4番目か5番目に大きいです。

◆ガルトゥング：その通りです。自衛隊は莫大な予算を投じており、攻撃的と分類される種類の兵器を持っています。つまり、行動半径が長いのです。自衛隊は現在国際的な役割を果たしており、望めばもっと広い国際的な役割を果たすことができます。非常に攻撃的です。防御的な側面はそれほど顕著ではありません。ご存知のように、憲法第9条は武器に反対しているのではなく、戦争に反対しているのです。第9条には真の自衛の余地がありますが、それは防衛兵器によるものでなければなりません。それは、地域兵、またはかつては領土兵器と呼ばれていたものでなければなりません。自衛隊は自衛には属さない空軍、海軍、そして必要に応じて派遣できる陸軍をもっています。

●安齋：憲法第9条のこうした誤った解釈は、憲法が制定された直後の1947年に始まりました。最も初期の論争の1つは、第2項の解釈に関するものでした。「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」とあります。「前項」とは何を規定しているのか？第9条第1項は、「日本国民は、国際紛争を解決する手段としては、戦争と武力による威嚇又は武力の行使を永久に放棄する」と規定しています。それで彼らは、自衛隊は文字通り「自衛のため」だから憲法9条に違反しない、と解釈したのです。しかし、吉田茂首相は自衛隊の違法性について問われたとき、ほとんどすべての戦争は自衛の名の下に行われており、自衛という概念自体が非常に危険であると明確に答えました。しかし、こうした議論の挙句、憲法9条の本来の意味は歪曲され続けました。そして、1957年に岸信介首相は核兵器でさえ憲法に違反しないと述べました。後の1998年には、大森法制局長官が

自衛のための核兵器の使用は憲法に違反しないとさえ述べました。

◆ガルトゥング：ある首相の解釈が次の解釈の基盤となり、それが続くという意味で、一種のインフレです。そしてもちろん、彼らが今目指しているのは、国連からの委任があれば、日本が積極的に戦争に参加できるようにするための再起草です。しかし、これに関して1つ指摘しておきたいことがあります。第9条に関して、「日本が防衛兵器は装備するがそれによって戦争を行わない」というのは不合理ではないと思いますが、第9条は、国際紛争を解決する他の方法については何も述べていません。

●安斎：ガルトゥング教授は、何十年もの間、戦争や軍備競争などの直接的な暴力だけでなく、構造的暴力など、多くの種類の暴力があることを私たちに教えてきました。毎年、戦争で殺される人の数はおそらく数万人から数十万人に上りますが、飢餓による死者の数は数百万人から1500万人に上ると言われています。

◆ガルトゥング：構造的暴力によって毎日約12万5000人が亡くなっています。世界が市場原理で運営されていれば薬代を払わなければなりません、人々にはお金がありません。そして、そのシステムの多くは米国によって維持されています。そこで平和的関係の構築が重要になります。平和的な貿易とは、構造的暴力を行使しないような貿易です。現代社会では、そのような精神は欠けています。日本の平和運動にとって9条支持を表明することは重要ですが、憲法にさらに平和的規程を追加することは可能です。

●安斎育郎：東京農工大学の瀬戸正之教授がかつて私に尋ねました。もし全人類67億人が入れる仮想の球体を設定した場合、その球体の直径はどれくらいかというのです。私たちは別々に計算し、同じ答えに達しました。わずか860メートルです。地球の直径はその1万倍です。つまり、地球は67億人の人類を養う能力を持っているのです。4秒に1人が栄養失調や飢餓などの不必要な原因で亡くなっているという事実は、自然現象ではなく、社会的・構造的な現象です。

◆ガルトゥング：その通りです。非常に単純な点を2つ挙げましょう。世界には耕作されていない地域が膨大にあることを知りたいなら、ロシアと米国の地図を見てください。私の小さな国ノルウェーは人口460万人ですが、1,200万人を容易に養うことができます。しかし、それに加えて、もう1つの大きな問題は不平等な分配です。世界は、少数の富裕層が、使ったり、食べたりできる以上のものを手に入れ、投機などに手を出せるようにできています。一方、底辺には悲惨な生活を送っている大勢の人々がいます。ですから、私の用語を使うなら、直接的な暴力と構造的な暴力という2つの大きな困難に直面しているのです。それは逆に言えば、直接的な平和と構造的な平和を意味します。解決は主に政治的意志の問題です。

●安斎育郎：私は、憲法9条と平和の重要性に関する手紙・写真・絵画を集めている「憲法9条メッセージ・プロジェクト」の代表です。そして、日本各地の集會に憲法9条をテーマにした講演者として招かれることが多くあります。しかし、人々の前で話すたびに複雑な気持ちになります。目の前の人々は憲法9条に関して私と同じ価値観を持っているので、私の話を聞く必要はないからです。ですから、集會に来ない人々に私の考えを伝えることは私にとって非常に重要です。

◆ガルトゥング：う。私もそうでした。講演の代わりはインターネットです。はるかに多くの人にメッセージが届きます。會議では、フィードバック、質問、スタンディング・オベーションなどを得ることができます。おそらくそれは自尊心には良いでしょう。しかし、もっと重要なのは、納得していない人々に届くことです。そして、おそらくインターネットはそれを実現する最良の方法でしょう。

●安斎：平和博物館でも同じ課題があります。平和博物館に来る人は素晴らしいし、大歓迎ですが、私たちは、来たがらない人々をもっと招き入れる方法を見つけなければなりません。

◆ガルトゥング：まさにその通りです。何年も前、私は、おそらく世界最大の平和博物館の設計を手伝うよう依頼されました。フランスのノルマンディー

にあるカーン記念館です。博物館にはすでに第二次世界大戦の反戦セクションと冷戦セクションがあり、3番目のセクションが平和博物館でした。平和の肯定的な側面に取り組むのが最も興味深いと思いました。来館者が何らかの印象を受けることが非常に重要だと思います。

●安齋：はい、その通りです。2005年に国際平和ミュージアムがリニューアルされ、その方向に進みました。戦争の記憶だけでなく、構造的暴力の記憶や、これらの問題を解決する方法を紹介する展示を用意しました。また、平和のために活動する12のNGOの活動を紹介する部屋も設けました。これも非常に重要なことでした。来館者に、自分たちで何ができるかを考えてもらうよう訴えました。

◆ガルトゥング：さて、ここでの主な焦点である第9条に戻りましょう。私は、それが存在しているという事実が驚いています。これはすでに大きな成果です。あなたはそれについてもっとよく知っていますが、それは実際には日本人ではなく、もともとアメリカの政府関係者と非政府関係者によって書かれたのだと思います。その後、日本人はそれを受け入れました。そして、それを覆す努力がすぐに始まりました。そして、私たちは今ここにいます。安齋教授、あなたはこれから何が起ると思いますか？

●安齋：日本全国に約7,000の憲法9条の会があることが知られています。これは非常に珍しいことです。戦後の日本の歴史の中で、同様の経験が3回ありました。最初のは1954年、ビキニ環礁で米国の水素実験がなされたときです。ものすごい数の人々が核軍縮を叫ぶようになりました。2番目は1960年代、ベトナム戦争が起こっていたときです。日本ではベトナム戦争反対の運動が盛んで、400万人の労働組合員が戦争反対のストライキを起しました。

◆ガルトゥング：素晴らしいですね。

●安齋：3番目1970年代後半です。1978年に軍縮に関する初の国連特別総会が開催されました。日本国民は3000万人以上の署名を国連に送るなど、核軍縮を求める大規模なキャンペーンを展開しました。そして今、私たちは日本全国に9条の会を設

立し、平和運動の第4波を迎えています。これは一種の希望です。しかし、9条の会が1,000人ずつ組織したとしても、700万人にしかならず、政府の動きを止めるには十分ではありません。ですから、私たちはもっともっと動員しなければなりません。

◆ガルトゥング：日本には130の米軍基地があります。あなたが指摘したように、これらの7,000の9条の会があることは良いことですが、それは日本の政治や政府と関連していなければなりません。

●安齋：日本の国民は、政府が常に正しいわけではないことに気づき始めています。国民は政府に完全に依存することは良くないことに気づき始めており、この現実に適応しつつあります。あなたが初めて日本に来られたのは1968年ですが、1960年代は、ベトナム戦争反対の大きな運動が見られるように、一方では非常に活発だった時期ですが、他方では非常に危険10年間でもありました。例えば、その時期に日本政府は、日本の都市に無差別爆撃を行い80万人を殺した米軍司令官カーティス・ルメイに、授与できる最高の勲章である勲一等旭日大綬章を授与しました。これは、憲法9条の精神に明らかに違反する行為でした。

◆ガルトゥング：自国の殺人者に勲章を授与するというのは、米国への服従の極みでした。カーティス・ルメイは当初、民間人への爆撃に反対していました。しかし、ドイツ軍の爆撃の背後にいたイギリス人アーサー・ハリスに説得されたのです。ハリスは1920年代初め、イラクでイギリスの植民地主義に反対するイラクの反乱に対する爆撃を開始し、その後アフガニスタンへの爆弾投下へと移りました。そして、彼はルメイを説得しました。なぜなら、「他の手段による政治の継続として戦争」の精神で戦争を遂行する唯一の方法だったからです。そのドクトリンは、労働者階級の地区に爆撃を集中させるというものでした。なぜなら、そこに住む人々はより密集して暮らしていたため、爆弾1発あたりの被害数が多くなるからです。

もう一度、日本政府の限界点はどこなのかという疑問を抱きます。私は9条の旗を高く掲げたいと思います。重要なのは、それがシグナルであるとい

うことです。ヨーロッパの観点から見ると、それは実際に戦争権を持つ国家体制を先導した反ウェストファリア平和条約のシグナルです。第9条は、この国には戦争権がなく、戦争権を放棄するとしています。それを守り、世界を啓蒙するための道しるべにしてください。

●安斎：私が平和運動に関わるようになったのは、1960年に東京大学に入学した時です。その年は日米安保反対の運動が起こった年でした。岸信介首相が辞任に追い込まれたのを見て、市民運動に自分たちが関わることで社会を変えることができると認識しました。今の若者はそのようなことを経験していません。数年前にあなたと私が共著した『日本は危機か?』という本では、自立の重要性について書きました。日本政府の自立性はほとんどゼロにまで低下しています。そのため、今、国民の自立が非常に重要になっています。私は、個人レベル、NGOレベル、政府レベル、国際レベルなど、市民運動のあらゆるレベルでこの自治を奨励したいと思います。

◆ガルトゥング：あなたはこの会話を立命館の初期の歴史にさかのぼることから始めました。最後に、1989年10月11日の月曜日に戻りたいと思います。その日、冷戦は終結しました。ライブツィヒの通りに5万人が集まりました。彼らは武器を持っていませんでした。持っていたのは松明だけでした。彼らは州警察に囲まれていました。彼らはガンジーやマーティン・ルーサー・キングについて語り、自由と移動の権利を主張していました。ライブツィヒの警察署長は悲しげな声で、ここには暴力的な人は誰もいないと言いました。それが終わりでした。人々がそれをもたらしたのです。1か月後の1989年11月11日、ベルリンの壁が開かれました。つまり、人々の運動が重要なのです。また、非暴力も重要です。暴力行為は口実として利用されます。ですから、主要な運動を下から育て、非暴力を維持し、前向きなメッセージを伝えましょう。

●安斎：そうです。若い世代を励ますために、私たち自身も引き続き動員しましょう。

◆ガルトゥング：はい、自立のために。

